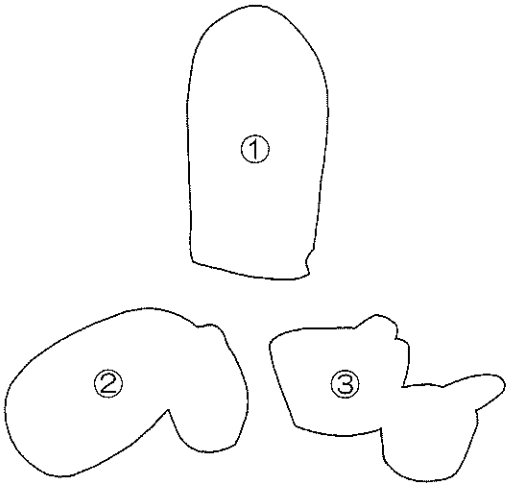
阪南市の歴史文化遺産

～指定文化財を中心に～

２０１８年2月２６日

大阪府阪南市教育委員会



（表紙説明）

①地蔵菩薩立像（じぞうぼさつりゅうぞう）（応永10年銘）

②マダコツボ（弥生時代末期） イイダコツボ（飛鳥・奈良時代）

③孝行臼（こうこううす）（江戸時代）

ごあいさつ

阪南市は大阪府南部に位置し、古くは平安時代に京都上賀茂神社の荘園だった筥作(箱作)荘や河内の観心寺領の荘園だった鳥取荘などがあり、江戸時代の頃は綿織物や瓦、製糖等の産業が栄え、和泉砂岩の産地としても知られたところでした。

また、本市には国の文化財保護法に基づく文化財が４件、大阪府文化財保護条例に基づく文化財が５件ありますが、本市でも郷土の歴史文化資源を後世に伝えるため、平成 12 年 11 月 1 日に「阪南市文化財保護条例」を施行したところです。

このような中、平成 13 年 1 月 26 日に本条例に基づき、文化財保護審議会委員６名(任期２年)をもって第１回文化財保護審議会を開催し、平成 14 年３月 14 日に２件の阪南市指定有形文化財を指定したところであり、現在では有形民俗文化財など 29 件の文化財指定を行っております。

本市の指定文化財の特徴は、絵画や彫刻等にとどまることなく石工業、タコツボ漁、造船業、瓦製造業、製糖業など地元の生業にかかわる「阪南市らしいもの」を積極的に指定してきたことが特徴となっており、本書掲載の多くの文化財は、皆様からの寄贈や寄託されたものであります。

本市では、歴史・文化を継承するため、「阪南市指定文化財展」や「歴史文化財講座」などを開催し、地域への愛着や郷土愛の醸成を図ることが、地域文化の振興や魅力あるまちづくりにつながるものと考えております。

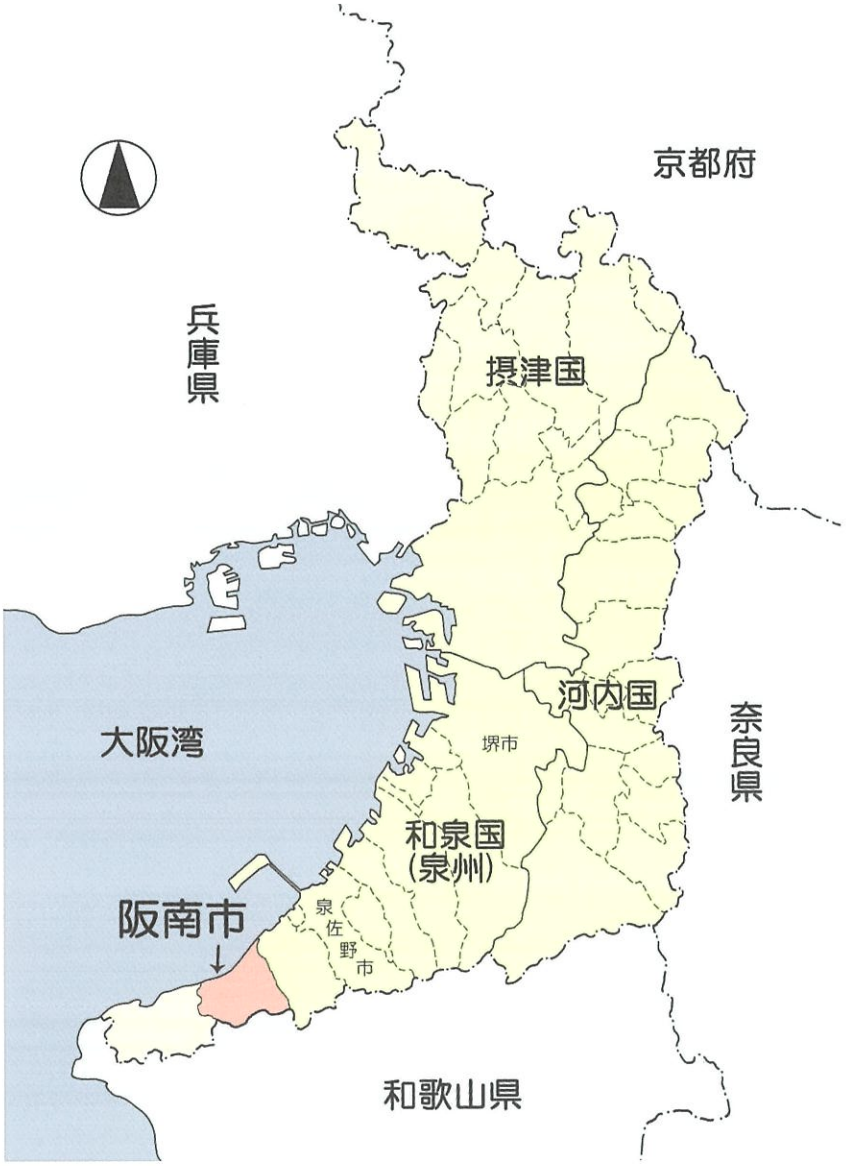
そのため、本報告書が地域に誇りを持つきっかけとして、また、歴史文化を生かした地域づくりに広く活用され、歴史文化資源の掘起こしや文化財保護への理解、認識を深める一助となることを願っております。

最後に、文化財をご提供いただきました皆様、文化財保護審議会委員各位、本書作成助成をいただきました「公益財団法人朝日新聞文化財団」様には、深いご理解とご協力を賜りまして、厚く感謝の意を表すとともに、今後ともより一層のご支援をお願い申しあげます。

2018 年 2 月 26 日

阪南市教育委員会

教育長　橋本眞一



大阪府阪南市の位置図

大阪府の堺市以南は和泉国または泉州と呼ばれ、その中でも泉佐野市以南は日根郡、今の阪南市域は鳥取郷と呼ばれていました。

市　章

阪南の「は」の字を図案化したもの。広がりゆく水輪(みずわ)をイメージし、調和と平和を象徴する大小の輪で、未来に向って大きく躍進(やくしん)する阪南市の姿を表しています。

市の木　　まつ

全ての国民から愛され泉州の人々には特に親しまれている一方、風雪に耐え、姿の豪華(ごうか)さは縁起のよい木とされ、正月の門松、庭木など市民の生活に強く結び付き、その成長は市の発展を象徴します。

市の花　　さつき

わが国固有の花木で広く山野に自生し、多くの人々に愛されてきました。色彩の豊富さと変化、花弁の妙などほかに比べる花はなく、市の美しい人情と気品を象徴します。

目　次

名産和泉石と泉州石工

名産和泉石……1
和泉石と泉州石工……3
全国各地に残る阪南市域の石工銘が彫られた作品……4
阪南市内に残る石切場跡……16
和泉砂岩の作品ができるまで……17
石工用具……21
石造物……27
こんな所にも和泉石……29

泉州の伝統漁法と造船技術

泉州で始まったタコツボ漁……33
大阪湾南岸のタコツボ漁具……34
泉州で始まった和泉打瀬……40
泉州の船「黒舳」……41
横田家船大工用具……42

泉州の瓦づくり

泉州の瓦づくりの始まり……46
屋根瓦の種類……48
瓦の製作方法……49
土手家瓦製造用具……52
瓦製品……57

泉州の砂糖づくり

砂糖づくりの始まり……58
日根郡鳥取郷の砂糖製造用具……63

文化財審議会委員寄稿

「来し方行く末」を語り、つづりましょう　西山要一……65
阪南市の近世史料　岡田光代……67
サトウキビとサトウモロコシ　岡本素治……68
阪南市大願寺石造地蔵菩薩像をめぐって　髙橋平明……70
砂糖製造用具　伊達仁美……72

あとがき……74

一　覧　表

用語解説……75
主要参考資料……77
阪南市指定文化財一覧……78
阪南市文化財保護条例……79

※印が付いた語句は、巻末の「用語解説」と合わせてご覧ください。

名産和泉石と泉州石工

◆名産和泉石◆

この絵は、寛政８(1796)年に出版された『和泉名所図会』に描かれたものです。作業場と思われる松の木陰の小屋周辺で、和泉石(和泉砂岩)を使って燈籠や狛犬をつくっている職人たちがいきいきと描かれており、「和泉石ハ其性細密にして物を造るに自在也、鳥取荘・箱作に石匠多し」と書かれています。

つまり、「和泉石はきめが細かくて、色々なものを思いのままに造ることができ、鳥取荘・箱作(共に阪南市)には石工(いしく※)がたくさんいた」ということです。

阪南市内の神社やお寺では、青みがかった灰色のきめ細かい石でできた燈籠や狛犬や墓石を必ず目にします。それらの石は、かつて「名産和泉石(めいさんいずみいし)」とまで呼ばれていました。

◆和泉石と泉州石工◆

和泉石(和泉砂岩)は、大阪府泉南地方に産する砂岩で、青緑色をしていることから「和泉青石」とも呼ばれます。和泉砂岩を産出する和泉層群は、約１億～6400万年前の白亜紀後期の堆積岩で、三重県から奈良県、大阪府、和歌山県、淡路島(兵庫県)、徳島県、香川県、そして愛媛県にまで分布しています。和泉砂岩は軟質のため細密な加工がしやすく、加工直後の見栄えも良いので、石材として高い評価を受けています。

和泉国(泉州)の石工が初めて文献に登場するのは、弘仁5(814)年に成立した氏族の系譜を記した『新撰姓氏録』の中で、「和泉国神別」の条に「石作連」の記載が見られます。泉州石工がこの石作連の末裔であるのかは定かではありませんが、阪南市域の山間部から良質の石材が採れることから、少なくとも石の切出しや加工は、絶えず行われてきたと考えられます。

17世紀初頭には、仙台、岡崎、岡山、高松、行橋などで城や寺院の造営が行われた際、和泉国(泉州)から石工が招かれたと伝えられています。その後も石工たちは各地に出向き、作品に出身地である「泉州」の地名を刻んだことから「泉州石工」と呼ばれるようになりました。泉州石工は特に腕が良かったため、そのまま現地に留まる者もあり、子孫の中には、現在も石材業を営んでいる人たちがいます。下の写真は、宮城県仙台市の称覚寺境内にある黒田家の初代黒田屋八兵衛の墓碑で、向かって右側面には「生國泉州日根郡／黒田屋八兵衛」と刻まれています。黒田家の先祖は、仙台城築城のため大坂から来たと代々伝えられており、現在も仙台市で石材業を営んでいます。

初代黒田屋八兵衛の墓(宮城県仙台市称覚寺)

生國泉州日根郡
黒田屋八兵衛

石工銘

◆全国各地に残る阪南市域の石工銘が彫られた作品◆

泉州石工銘が刻まれた石造物の存在については、自治体史編纂時から知られていました。

昭和49年、岐阜県関市在住の郷土史家の情報により、当地の白山神社に残る鳥居と手水鉢に、箱作村(阪南市箱作)出身の石工銘が確認されたのです。その１年後には、岐阜県岐阜市の三輪神社の鳥居と、岐阜県関市の春日神社の鳥居にも、箱作村出身の石工銘が確認されています。

また、阪南市の旧家が所蔵する史料からも、江戸時代、諸国に出稼ぎに行っている多数の石工が存在したことが確認されています。

阪南市教育委員会では、平成22年、泉州石工の活躍について本格的な調査を進めるために、各都府県の教育委員会の協力を得て、市町村へのアンケート調査を実施しました。これにより多数の貴重な情報が寄せられ、現在1000余りのデータが集成されています。それらを元に上述の岐阜県をはじめ、宮城、岐阜、愛知、三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山、鳥取、岡山、広島、福岡、熊本、大分での現地調査を行いました。阪南市域出身の石工たちの作品は実に多彩で、全ての作品を掲載したいのですが、今回は出身村がわかっている石工銘の彫られた作品をいくつかご紹介します。

旧村名一覧

尾崎	おざき
下出	しもいで
黒田	くろだ
石田	いしだ
鳥取中	とっとりなか
自然田	じねんだ
山中	やまなか
桑畑	くわばた
新	しん
波有手	ぼうで
舞	まい
貝掛	かいかけ
箱作	はこつくり
山中新田	やまなかしんでん

阪南市域の旧村図
(和泉国日根郡鳥取郷)

全国各地に残る
泉州石工の足跡

鳥取庄(郷)出身石工の作品

三重県伊勢市の今北山墓地(荒木田氏墓地)にある宇治橋供養塔です。塔身と台石の間の基礎部正面の向かって左端には「石屋大工敬白／泉州日根郡鳥取庄」と刻まれていて、阪南市域出身の石工がこの作品をつくったことがわかります。また、同じく右端に「天正八(1580)年庚辰閏三月十二日／橋御供養」と刻まれているように、宇治橋が竣工した際に橋供養が行われ、橋の傍らに建立されたのがこの供養塔です。

材質は和泉砂岩で、高さは245cmあります。400年以上も前につくられたものですが、保存状態は良好です。

どのようないきさつで今北山墓地に移されたのかは不明ですが、この宇治橋供養塔は、大阪府以外に所在する石工銘が確認できる最古の作品であり、昭和48年12月5日に伊勢市指定有形文化財※に指定されています。

宇治橋供養塔(三重県伊勢市今北山墓地)

石屋大工敬白
泉州日根郡鳥取庄

石工銘

石田村出身石工の作品

鳥取県日野郡日南町の川上神社跡地に建つ鳥居です。川上神社は大正8(1919)年に東楽々福神社に合祀されましたが、跡地には今も鳥居が現存しています。左右の柱の銘から、鳥居は安永2(1773)年に建てられたもので、石田村の根来松右衛門と黒田村の根来伊右衛門によりつくられたことがわかります。

鳥　居(鳥取県日野郡日南町川上神社跡地)

石工銘

石工泉州
黒田村同苗伊右衛門
石田村根来松右衛門

狛　犬(大阪府阪南市鳥取戎神社)

阪南市石田の鳥取戎神社境内に建つ狛犬は和泉砂岩製で、安政5(1858)年に石田村の辻源助によりつくられたものです。台石2段目の正面には「奉納」とあり、願主などの銘は見られませんので、石工辻源助が自ら奉納したものでしょう。なお、阿形の狛犬の台石にも、同様の銘が刻まれています。

石工銘

石田
辻源助

黒田村出身石工の作品①

世界遺産である高野山(和歌山県伊都郡高野町)奥之院は、弘法大師御廟がある聖域です。約2km続く奥之院参道には、20万基を超えると言われる供養塔や慰霊碑などが杉や高野槙の巨木を背景に建ち並んでいます。

それらの中で最も大きいことから「一番石」の名でひろく知られているのは、寛永4(1627)年に駿河大納言忠長が母崇源院(江戸幕府2代将軍徳川秀忠の正室、3代将軍家光の生母)のために建立した供養塔です。材質は花崗岩で、高さは6.6mにも及びます。

この五輪塔の台座背面には「石作　泉州黒田村甚左衛門」と彫られており、黒田村(阪南市黒田)の甚左衛門という石工の作品であることがわかっています。

崇源院供養塔(和歌山県伊都郡高野町高野山奥之院)

石作
泉州黒田村甚左衛門

石工銘

黒田村出身石工の作品②

兵庫県加西市の一乗寺入口に架けられた石橋の向って右側奥の欄干親柱には、黒田村兵庫市兵衛尉忠治の名が刻まれています。柱の高さは89cmで、石工銘の右側の銘から貞享3(1686)年6月18日につくられたことがわかります。

石　橋(兵庫県加西市一乗寺)

石工銘

石工泉州黒田村兵庫市兵衛尉忠治

岐阜県岐阜市にある真長寺の石段です。石段最上部の左側親柱には黒田村瀧本太郎兵衛の名が刻まれています。また、右側親柱には「宝永四丁亥年」と刻まれていることから、宝永4(1707)年につくられたことが分かります。

石　段(岐阜県岐阜市真長寺)

石工銘

石工　泉州日根郡黒田村　瀧本太郎兵衛

下出村出身石工の作品

滋賀県甲賀市の八坂神社にある花崗岩製の反橋で、凝ったつくりを見せています。橋桁に刻まれた銘文から、元禄12(1699)年に雨乞祈願のお礼として、氏子により奉納されたものであることがわかります。銘文の末尾には、下出村の石工惣兵衛の名が刻まれています。また、この石橋は、尾崎村の石工長兵衛がおよそ130年後の天保5(1834)年に改修したことが、やはり橋桁に刻まれた銘文から読み取れます。昭和59年4月に甲賀市指定有形文化財に指定されています。

石　橋(滋賀県甲賀市八坂神社)

泉州日根之郡
鳥取庄下出村
石細工惣兵衛

石工銘

石　碑(岡山県高梁市龍泉寺)

施主石工泉州中(ママ)日根郡取鳥(ママ)
庄下出村岡本源兵衛

石工銘

岡山県高梁市にある龍泉寺入口に建つ石碑です。正面には「葷辛(野菜の中でも臭い物と辛い物)酒肉門内に入るを許さず」という意味の銘文が刻まれています。また、両側面の銘文からは、安永4(1775)年に大願成就のお礼としてつくられたことがわかります。そして石工銘の頭に「施主」とあることから、下出村の石工岡本源兵衛が自らつくり、奉納したのではないかと思われます。

自然田村・鳥取中村出身石工の作品

多宝塔(奈良県桜井市長谷寺)

長谷寺は、奈良県桜井市にある、西国三十三所観音霊場の札所です。多宝塔と呼ばれる石塔は、長谷寺境内に建つ不動堂の南側にあります。塔身に刻まれた銘から、元禄8(1695)年につくられたことがわかります。また、基礎石には「泉州自然田／石工七兵衛」と刻まれています。

石工銘

泉州自然田
石工七兵衛

燈　籠(奈良県桜井市談山神社)

泉州日根郡取鳥(ママ)庄石大工
中村文七
自然田安兵衛

石工銘

談山神社は奈良県桜井市多武峰にある藤原鎌足を祀る神社です。十三重塔の近くに建てられた高さ約2mの燈籠は、寛文8(1668)年に寄進されたもので、竿部には中村の文七と自然田村の安兵衛両名の石工銘が刻まれています。

尾崎村出身石工の作品

十三重石塔(京都府木津川市海住山寺)

京都府木津川市にある海住山寺の十三重石塔は、総高390cmあります。享保18(1733)年に建てられていて、基礎石の正面に刻まれた石工銘から、尾崎村の権九良によりつくられたことがわかります。

石工銘

石工　泉州尾崎村権九良

石　祠(大阪府阪南市山中神社)

石工銘

石工　尾崎宗七

阪南市の山中渓にある山中神社境内に祀られた和泉砂岩製の祠です。基礎石に彫られた銘から、嘉永5(1852)年に尾崎村の石工宗七によりつくられたことがわかります。この祠には、熊野古道九十九王子であった馬目王子社の御神体である丸い石が祀られています。

波有手村出身石工の作品

宝篋印塔(広島県三次市大楽寺)

広島県三次市にある大楽寺の山門をくぐると左手に宝篋印塔が見えます。明和2(1765)年に建てられたもので、台石の背面の銘から波有手村の石工長七によりつくられたことがわかります。

泉州
波有手村
石工長七

石工銘

宝篋印塔(岡山県岡山市向山千日墓地)

岡山県岡山市にある向山千日墓地の一角に、ひときわ立派な宝篋印塔が建てられています。基壇に刻まれた銘により、宝暦11(1761)年に波有手村の石工畑仲松兵衛によりつくられたことがわかります。

石工
泉州鳥取
所(ママ)波有手
村
畑仲松兵衛

石工銘

貝掛村出身石工の作品

燈　籠(京都府京丹後市谷内墓地)

石工
泉州住
貝掛十右衛門

石工銘

京都府京丹後市にある谷内墓地に建てられた燈籠で、墓地の由来を記した石碑に隣接しています。高さは150cm余りで、竿部の銘により宝永4(1707)年に貝掛村の十右衛門によりつくられたことがわかります。

六十六部供養塔(岡山県岡山市地蔵堂)

石工　泉州貝掛住里山源兵衛橋範安

石工銘

岡山県岡山市にある地蔵堂境内には、珍しい形をした供養塔が建てられています。これは経巻型と呼ばれるもので、正面には「奉納／大乗妙典六十六部／日本回国／供養塔」と刻まれていて、背面の銘から、文化2(1805)年に貝掛村の石工里山源兵衛橋範安によりつくられたことがわかります。

箱作村出身石工の作品

岐阜県関市にある白山神社の鳥居です。明神鳥居と呼ばれるもので、材質は和泉砂岩です。右側の柱正面の銘により、寛文11(1671)年に箱作村の石工藤原長次によりつくられたことがわかります。

鳥　居(岐阜県関市白山神社)

泉州日根箱作村住石工藤原長次

石工銘

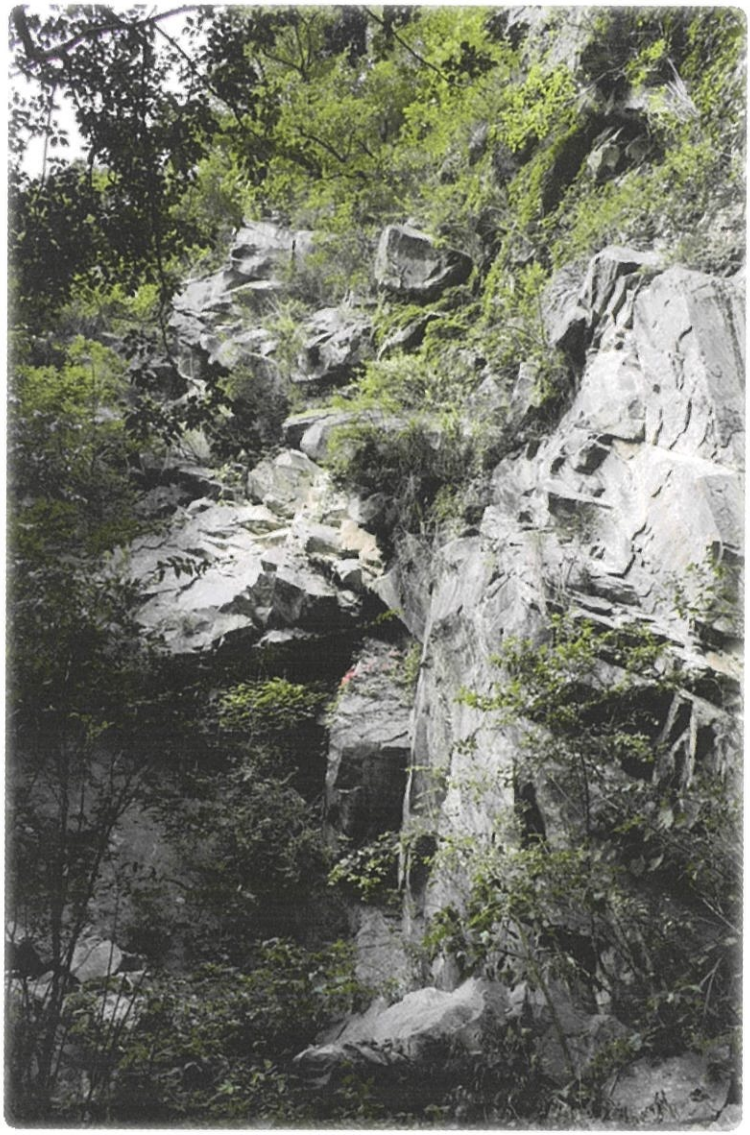
岐阜県多治見市にある笠原神明宮の手水鉢です。材質は花崗岩で、正面には十六弁の菊花紋が彫られています。寛延2(1749)年に奉納されていて、箱作村の石工井坂半七郎によりつくられたものです。平成元年12月10日に多治見市指定有形文化財に指定されました。

手水鉢(岐阜県多治見市笠原神明宮)

泉州箱作村
石工
井坂半七郎

石工銘

◆阪南市内に残る石切場跡◆



石切場(山中渓)
昭和35年まで採石が行われていました

火薬庫(山中渓)
岩盤(がんばん)から石を切り出す時に
使う火薬を保管しました

コッパ(山中渓)
石を切り出したり細工した
時に出る破片です

ヤ穴(あな※)の残る石(箱作)

細かいヤ穴の残る石(箱作)

石臼未成品(みせいひん※)(箱作)
石臼などの製品加工も一部
行われていました。

◆和泉砂岩の作品ができるまで◆

山石工(石切場で石を採る石工)の仕事

①明治30年代になると、岩盤(がんばん)から石を切り出すのに火薬が使われだします。岩盤に細く深い穴をあけ、火薬を詰めて爆破(ばくは)させ、山を崩します。それ以前はヤやゲンノウなどを使い石材を岩盤から切り出していました。

來田組石切場(阪南市桑畑)

②切り出した大きな石のメ(岩石の割れやすい方向)に沿いチッパを使ってヤ穴をいくつかあけているところです。チッパとは、昭和40年代に機械化が始まってから使われ出したドリルで、それ以前は、ソコウチノミとセットウを使い、ヤ穴を掘りました。

③セリガネとヤをヤ穴に詰めているところです。ヤとは石を割る時に使用する鉄製の楔(くさび)で、セリガネはヤの滑りをよくするものです。ヤにはシメヤ、トビヤ、セリヤなどの種類があります。

④ヤをゲンノウで打ち込みます。このときヤを均等にたたいて打ち込まなければいけません。石工の腕の見せどころです。

⑤何回かゲンノウを打ちおろすと、石のメに沿い、きれいに亀裂(きれつ)が走ります。

⑥大きな石が見事に割れました。

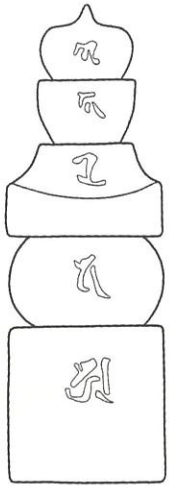
石材加工：和田石材店(和歌山県伊都郡かつらぎ町)

細工石工(製品をつくる石工)の仕事　一石五輪塔をつくる

五輪塔とは、宇宙の万物を構成するとされる地・水・火・風・空の五大※を表す方形・球形・屋根形・半球形・宝珠形の石を下から順に積み上げた、仏塔の一種です。正面には、仏・菩薩などを梵字一文字で表した種子が彫られます。

平安時代末期(約850年前)頃からつくられ、古くは供養塔として、後には墓塔として数多くつくられました。8頁で紹介した高野山にある崇源院の供養塔も五輪塔です。こちらは五輪の各部を別々につくっていますが、室町時代(約680～440年前)には、一石五輪塔と呼ばれる、全体を一つの石から彫りだした小型のものも登場しました。

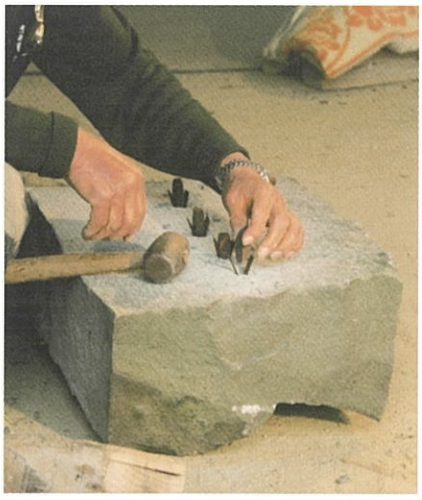
この一石五輪塔を細工石工である藪本靖夫氏(阪南市尾崎町)につくっていただきましたので、順を追って見ていきましょう。

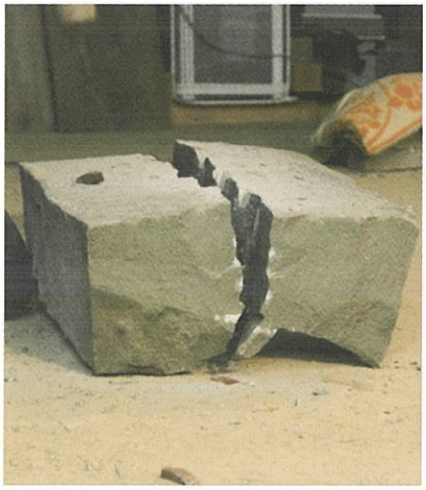


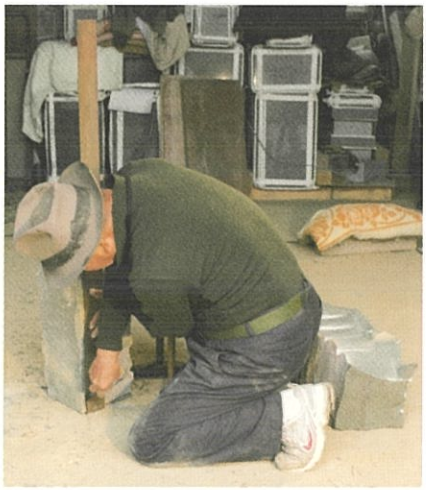
五輪塔

①石のメに沿ってサシガネとスミサシを使い墨を入れます。

②ソコウチノミとセットウでヤ穴を彫ります。


③ヤ穴にセリガネをセットしマメヤを入れます。


④マメヤをゲンノウで均等にたたいて石を割ります。

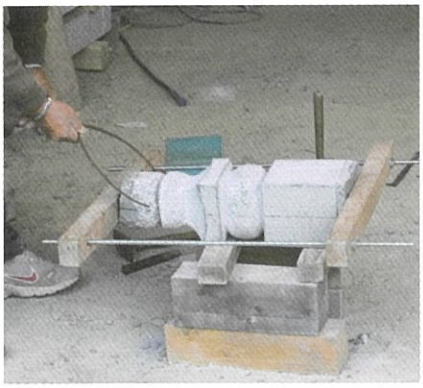

⑤サシガネなどの定規類とスミサシを使い直方体になるように墨入れします。

⑥オシキリとセットウで余分な部分を落とします。

⑦ノミとセットウで表面を平らに粗削(あらけず)りします。

⑧地輪(ちりん)から成形します。一面ずつ墨入れをし、タタキやビシャン、ハビシャンを使い面を平らにします。

⑨水輪(すいりん)と火輪(かりん)を粗彫りしたあと割れないように木枠で締め、ビシャンとハビシャンで表面を整えます。

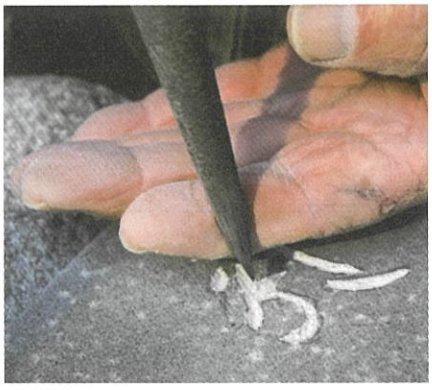


⑩風輪(ふうりん)を整えたあと、空輪(くうりん)をオシキリで粗くつくりだし、マルパスで幅を確認します。

⑪枠からはずし、空輪をノミとセットウで成形し、ハビシャンで表面を整え、空輪の中心に墨を入れ、さらに整えます。

⑫一石五輪塔の形ができあがりました。

⑬ジホリノミとセットウで、輪郭を彫ります。



⑭リョウサキノミを使い、彫りくぼめます。

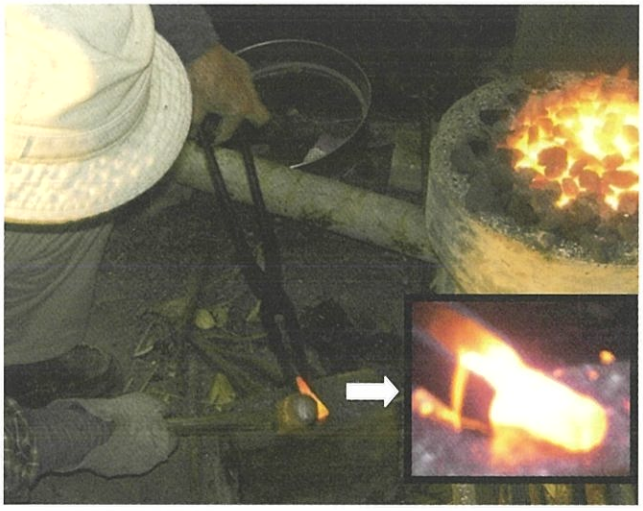
⑮一石五輪塔の完成です。

道具の製作と手入れ

石工は山で石を切り出したり、製品をつくったりするだけではなく、道具の製作や手入れをするための鍛冶仕事も自分で行っていました。採石の仕事をされていた黒川正氏(阪南市自然田)の作業場で、ヤをつくる鍛冶仕事を再現していただきました。

①フイゴ場と呼ばれる場所には、電気送風機と炉が置かれています。電気送風機がない時代には、木箱状のフイゴで炉に風を送りました。

②炉に火をおこし、送風機で風を送りながら火の強さを調節します。中ではヤの材料になる鉄片が熱せられています。



③赤く焼けてやわらかくなった鉄片をヒバサミではさみ、セットウでたたきます。冷えて硬くなってきたら炉に戻し、やわらかくなったら再びたたくことを繰り返し、ヤの形に仕上げます。

④できあがったヤを油につけて一気に冷やし、焼き入れをすることにより、硬度を高めます。

⑤ヤの完成です。作業場では、このほかにもノミの先端をつくり直したりもします。山石工、細工石工の区別なく、用具を自分で鍛え、手入れすることも、重要な石工仕事のひとつでした。

◆石工用具◆

來田家石工用具

石切場の近くに設けられた作業場で職人自身が自分の使いやすいように作製した用具や、日々手入れがなされた用具で、機械化された後のものまで286点を平成22年3月19日に指定しました。なお、同家は現在も桑畑で和泉砂岩の採石業を営んでいます。現在、需要のほとんどは土木建築資材に使用される砕石ですが、文化財などの修復などに用いられるケンチ石※や大型石材の提供も行っています。

重成家石工用具

山間部の石切場で採石などに従事する「山石工」の用具で、昭和30年代から平成10年頃までの主に機械化以後に使用されたものです。石の採取や成形に用いられる用具や鍛冶の用具165点を平成22年3月19日に指定しました。

黒川家石工用具

昭和30年代から50年頃まで石切場において使用されていた山石工の用具です。主な用具は機械化以後のもので、和泉砂岩の採取から成形に用いられる用具や鍛冶用具24点を平成23年3月30日に指定しました。

藪本家石工用具

石材の加工を行う「細工石工」の用具が中心で、当主が先代(親方)から受け継いだ用具と、本人が使用した用具294点を平成21年3月24日に指定しました。そのほとんどは石材加工が機械化される以前の伝統的な石工用具で、他家には見られないジホリノミやリョウサキノミ、石の面を調整するビシャンなどが含まれます。それらに加え、家紋を一覧できる「紋帳」や、狛犬などの石造物製作図案集ともいえる「雛型」が含まれるのは、細工石工ならではです。また、加工用の道具のみならず、携帯式鞴※に代表されるように、加工具の製作や手入れの際に使用される用具まで、幅広くそろっています。なお、同家は現在も阪南市内で石材店を営んでいます。

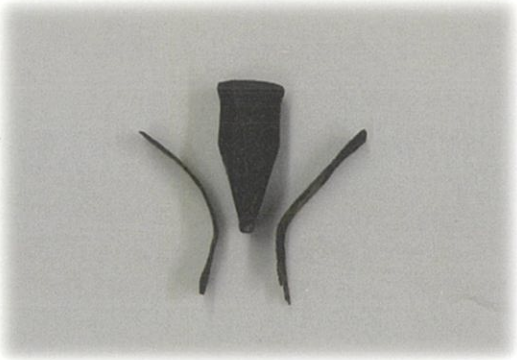
以上のように、來田家、重成家、黒川家、藪本家の石工用具を一括すると、和泉砂岩の採石から製品の完成に至るまで、一連の工程に使われた用具を知ることができます。次の頁では、それらを使用目的別にご紹介します。

石を割る用具

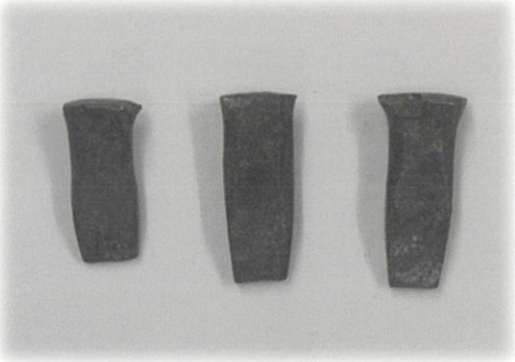
セットウ（重成家）
ノミなどの道具の頭をたたくカナヅチ

ソコウチノミ（藪本家）
ヤ穴を掘る

オオゲンノウ（來田家）
大型のカナヅチ

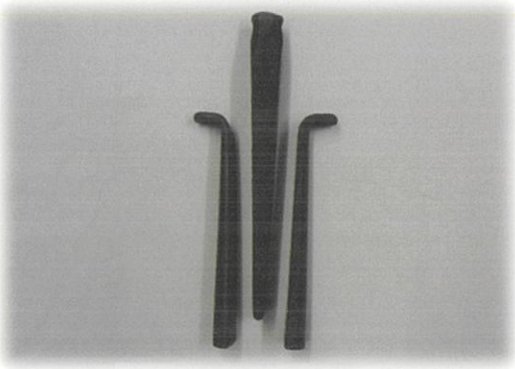


マメヤ・セリガネ（藪本家）
石の小割りに使用



シメヤ（重成家）
荒割り用の大型のヤ

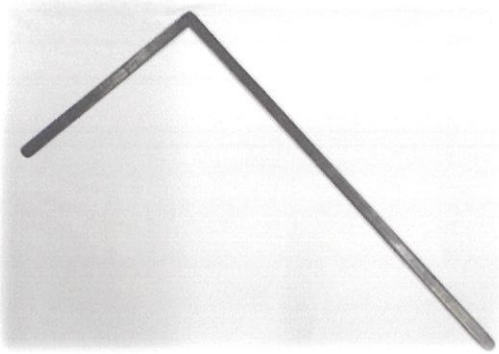
トビヤ（重成家）
小割り用のヤ。飛散を防ぐためゴムなどを付ける



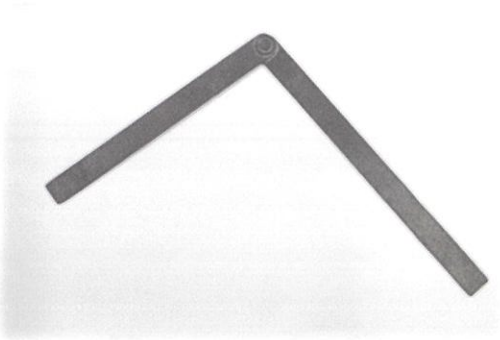
セリヤ（黒川家）
セリガネで両面をはさみこんだ大割り用のクサビヤ

ハゲンノウ（重成家）
粗割り用の大型のカナヅチ

形をつくっていく用具



サシガネ（藪本家）
計測・直角を確かめる



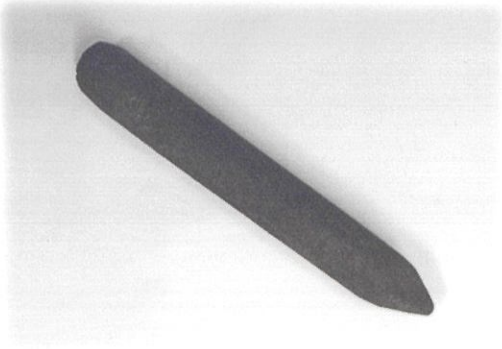
ジユウガネ（藪本家）
角度が変えられるサシガネ

チャンキリ（藪本家）
小さい石の角を欠き落とす

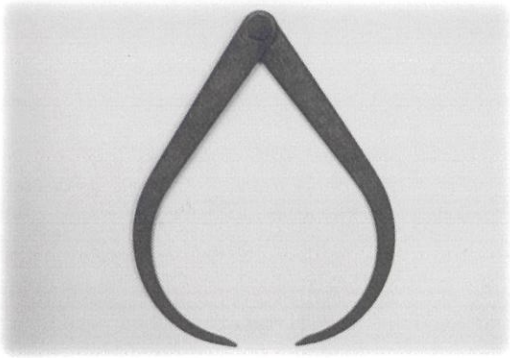
オシキリ（藪本家）
石の不要な部分を欠き落とす

セットウ（藪本家）
ノミなどの道具の頭をたたくカナヅチ

セットウ（藪本家）
ノミなどの道具の頭をたたくカナヅチ



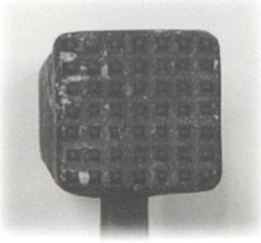
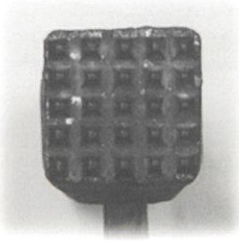
ノミ（藪本家）
セットウで頭をたたいて石を欠き削る



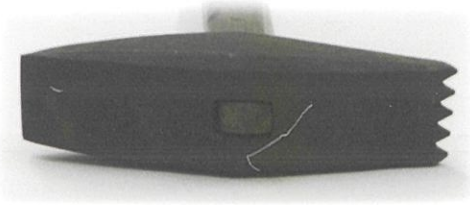
マルパス（藪本家）
石の外径を測る

石の表面を整えていく用具

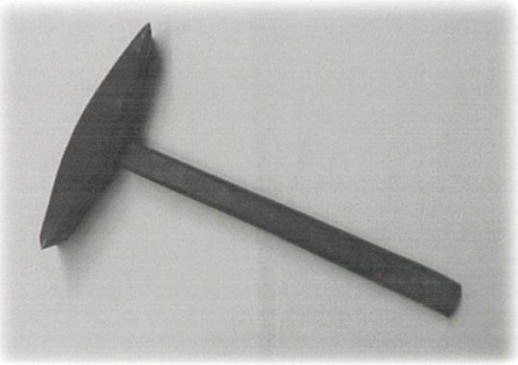
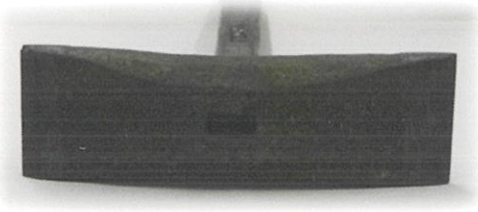
グンデラ（藪本家）
細かい部分を仕上げる

ビシャン（藪本家）
石面の細かい凹凸（おうとつ）をならす



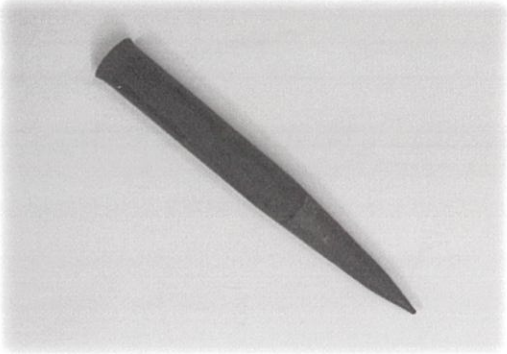
ハビシャン（藪本家）
角面・曲面を平らにする

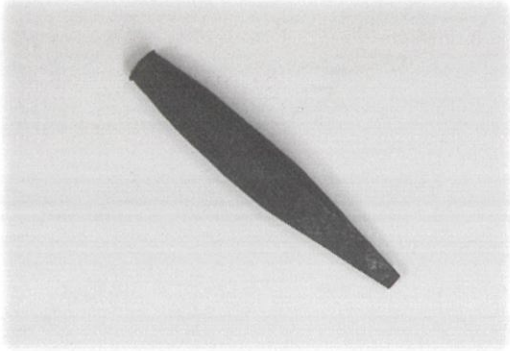
タタキ（藪本家）
表面をさらに平らに仕上げる

彫刻・刻字の用具

セットウ（藪本家）
ノミなどの道具の頭をたたくカナヅチ

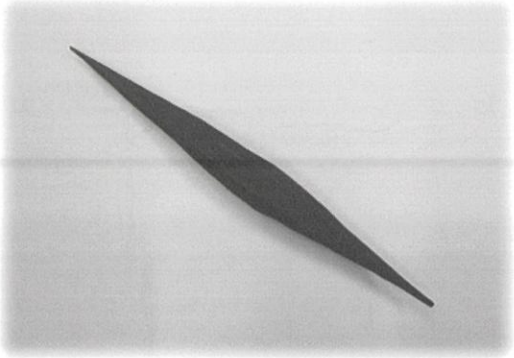


ジホリノミ（藪本家）
セットウでたたいて文字を彫る

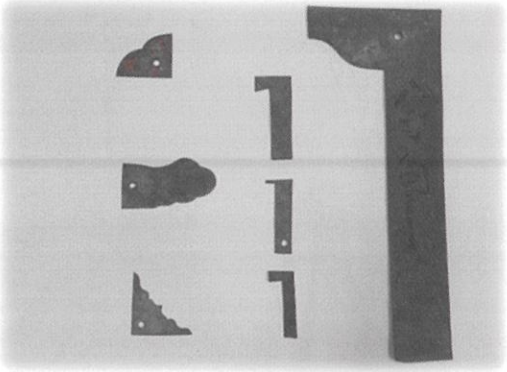


ジホリノミ（藪本家）
セットウでたたいて文字を彫る

イチョウノミ（藪本家）
セットウでたたいて文字を彫る

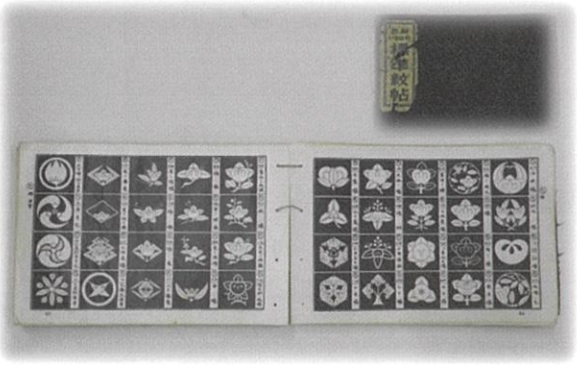


リョウサキノミ（藪本家）
ノミの重みを利用し文字を彫る



ゲージ（藪本家）
墓石の装飾のための型

『新撰石工雛型』（藪本家）
製図のための見本帳



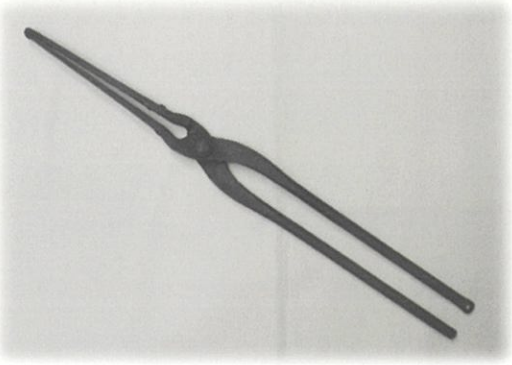
『図解いろは引標準紋帳』（藪本家）
紋の見本を集めた本

鍛冶の用具

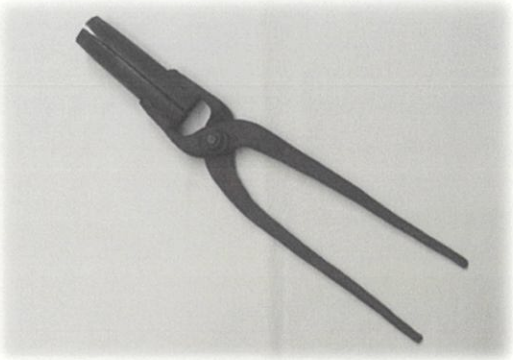
セットウ（藪本家）
ノミなどの道具の頭をたたくカナヅチ

ナラシ（藪本家）
鍛冶（かじ）用のカナヅチ

ヒバサミ（來田家）
火入れしたノミやヤなどをはさむ



ヒバサミ（黒川家）
火入れしたノミやヤなどをはさむ



ツツバサミ（黒川家）
ゲンノウなどを焼き入れする時にはさむ

ノミヅツ（黒川家）
火床（ひどこ）で焼いたノミを差し込む

ヤキヅツ（來田家）
火床で焼いたノミを差し込む

フイゴ（藪本家）
火の勢いを調節する送風機

阪南市
指定文化財

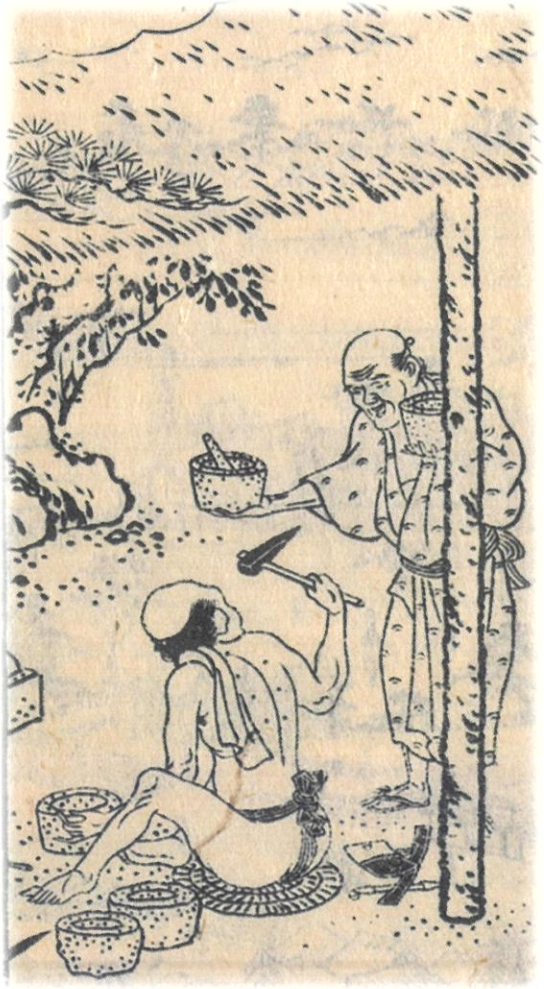
◆石　造　物◆

孝　行　臼

右の絵は2頁にある『和泉名所図会』の一部です。右側に立って石工と会話している人は、右手と左手に何かのせています。これらは「孝行臼」と呼ばれるもので、和泉砂岩製の臼です。また、左側の石工は孝行臼を製作しています。

臼には、大きく分けて杵を使って搗く搗臼と、回転運動によりすりつぶす挽臼があります。孝行臼は搗臼で、歯の抜けたお年寄りのために、硬い食べ物などを同じく和泉砂岩の小さな杵(右手の孝行臼の中からのぞいているものです)で搗いてやわらかくし、食べやすくするために用いられたことから、この名が付けられたようです。

杵で搗いてやわらかくした食べ物は、味をそこなうことなく、また、抹茶や白酒をつくるときにも使われたということで、『和泉名所図会』が書かれた江戸時代には、ポピュラーなものであったと思われます。しかし、現在では知る人もほとんどなく、現存する孝行臼はたいへん貴重であると考え、市内で確認できた7点を阪南市指定有形民俗文化財※に指定しました。そのなかの2点をご紹介します。



【臼】	重さ	8.60kg
	口径	23.0cm
	高さ	12.8cm
【杵】	重さ	1.06kg
	長さ	14.2cm

【臼】	重さ	2.04kg
	口径	12.6cm
	高さ	8.7cm
【杵】	重さ	0.48kg
	長さ	13.9cm

地蔵菩薩立像

この2点は和泉砂岩でつくられた石造物で、平成18年2月28日に阪南市指定有形文化財に指定されました。

応永10(1403)年の銘を持つ像高45cmの地蔵菩薩立像(上)は、年号が刻まれた石造物の中では、阪南市内で最古のものです。地蔵像の左右の銘から、応永10(1403)年の「霜月廿二」、つまり11月22日に宗一という禅尼(仏門に入った女性)が願主となってつくられたことがわかります。

願主宗一禅尼敬白

応永十癸　未霜月廿二

地蔵菩薩立像(応永10年銘)

奉造立地蔵菩薩檀那法印覚永　法印覚識本願出羽国住人宥円上人

地蔵菩薩立像(天文15年銘)

勧進貴賤上下所也天文十五年丙　午十月十八日　大工藤原兵衛太夫

また、天文15(1546)年につくられた地蔵菩薩立像(下)は、像高が2m近くもある大阪府下でも最大級の地蔵石仏で、現在は下出大願寺の門前に安置されています。こちらも地蔵像の左右に銘が刻まれていて出羽国(現在の山形県と秋田県)の宥円上人の願いにより「勧進貴賤上下」、つまり広く民衆から寄附を求めたことが読み取れます。そしてこの大きな地蔵像をつくりあげた人物は、大工藤原兵衛太夫であるのがわかります。

◆こんな所にも和泉石◆

井戸枠(尾崎)

「災害時協力井戸」として大阪府に登録されている井戸です。井戸枠はT字型に成形した和泉砂岩を4枚組み合わせています。

側溝蓋石(黒田)

道路の側溝には、鉄板に交じり、和泉砂岩が4枚並べられています。よく見るとこれらはT字型の井戸枠石です。解体した井戸枠を溝の蓋石に転用したのでしょう。

流し(黒田)

和泉砂岩でつくられた流しは市内で約20例確認できました。幅86～120cm、奥行き47～68cm、高さ14～20cmと多少の大小があります。左のものは幅105cm、奥行き60cm、高さは18cmです。排水については、穴をあけただけのものも見られました。

護岸・川床(波有手)

佐智川(さちがわ)の護岸(ごがん)はケンチ石が谷積(たにづ)みにされていて、川床にも人頭大の川原石が張られています。

蛇籠(山中)

山中川左岸で和泉砂岩を詰めた蛇籠(じゃかご)が見られます。蛇籠とは鉄線などで籠をつくり、自然石や砕石を詰めて河川工事に使用する伝統的工法で、江戸時代には竹で蛇籠を編みました。

突堤と舫石(尾崎)

海岸には、和泉砂岩のケンチ石が敷き詰められた突堤(とってい)が残っていました。手前の右端に写る石は、和泉砂岩の舫石(もやいいし)で、ロープを結びやすくするために中央にくびれが見られます。

石段(山中)

地福寺の境内に建つ子安地蔵堂前の石段です。幅2.3mの石段は、すべて和泉砂岩を用いてつくられています。左側袖石の上部には、「細工手間／施主」として土生常松、土生芳松、芝野新次郎の名と共に「現住慈誉代」と刻まれていることから、慈誉上人の住職歴任期間(1912～1926年)につくられたことがわかります。

石碑(山中)

独特の字体で「南無阿弥陀仏」と彫られた高さ96cmの和泉砂岩の自然石碑で、是得上人の「六字名号碑」と呼ばれるものです。是得上人は紀伊国出身の行脚僧で、阪南市内では7基の名号碑が確認されています。

石碑(新)

正面に真言宗で唱える最も短いお経「南無大師遍聖(ママ)金剛」が刻まれている石碑です。正面左には「文政十二(1829)／丑九月吉日」と刻まれています。素焼の蛸壺を花筒として使っているのは実に阪南市らしい光景です。

鳥居(山中)

山中神社の入口に建つ鳥居で、高さは約2.6mあります。鳥居の右側柱の背面には、「貞享元(1684)年十二月六日」と刻まれています。山中神社の境内には、この鳥居のほかにも燈籠や狛犬など、和泉砂岩でつくられた石造物がたくさん見られます。

前机(貝掛)

貝掛共同墓地の前机です。前机とは、迎え本尊へのお供え物を載せる机で、幅87cm、奥行き21cm、厚み15cmの天板と、高さ40cmの脚部に分かれます。天板の側面に「元文二(1737)年丁巳正月廿五日」と刻まれていて、文字が横向きで不自然な気がしますが奈良県奈良市田原地区の長谷町埋墓にも、享保11(1726)年銘の同様の前机が見られます。

土塀(鳥取中)

潮音寺の西側と北側の土塀は、外から見るとモルタルで補修されている部分が多いですが、境内に立って見ると和泉砂岩がびっしりと埋め込まれているのがわかります。また、「俗名おいと」と彫られた和泉砂岩製の墓石の一部もまじっています。

泉州の伝統漁法と造船技術

◆泉州で始まったタコツボ漁◆

泉州地域の海岸沿い(大阪湾南岸)で始まった漁法のひとつに「タコツボ漁」があります。日本近海には約60種類のタコが生息していますが、大阪湾で漁の対象となるのは、主にマダコとイイダコの2種類です。マダコは体長60cm程の、わたしたちが一般にタコと呼んでいるものです。イイダコは体長20cm位の小型のタコで、胴部にぎっしりと詰まった卵が米粒に似ていることから、米＝飯により、飯ダコの名前で呼ばれています。

タコは、狭いところに入り込もうとする習性があり、それを利用したのがタコツボ漁です。このタコツボ漁は、弥生時代中期(約2200～2000年前)に始まったとされ、日本最古のタコツボが、池上曽根遺跡(大阪府和泉市・泉大津市)で発見されています。阪南市でも、弥生時代末期(約1800年前)のマダコツボが尾崎海岸遺跡(阪南市尾崎)で出土しています。また、鎌倉時代(約830～680年前)の遺跡では、大量のタコツボと共に、タコツボを焼いた跡が見つかることもあります。田山東遺跡(阪南市箱作)では、タコツボの窯跡が８基まとまって見つかりました。海岸にも近いこの場所は、タコツボの生産工場であったと考えられています。

阪南市では、現在もタコ漁は行われていますが、タコカゴを用いるのが主流となり、タコツボ漁を専門に行っているのは、2軒のみになりました。

タコツボの窯跡(田山東遺跡)

阪南市
指定文化財

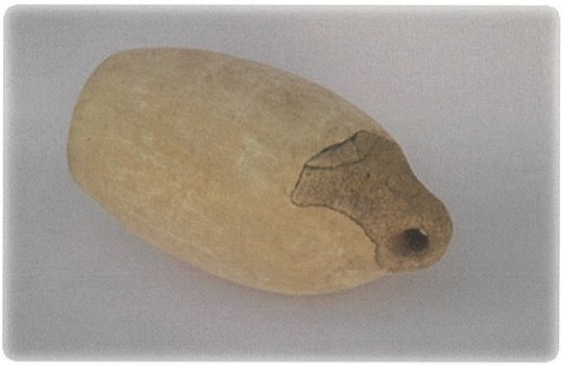
◆大阪湾南岸のタコツボ漁具◆

阪南市では、遺跡から見つかったタコツボ6点を有形文化財※に、江戸時代以降の今に伝わる様々なタコツボとタコツボ漁に使われる道具22点を有形民俗文化財※として、平成28年4月15日に阪南市指定文化財に指定しました。

タコツボ

マダコツボ　(弥生時代末期)

尾崎海岸遺跡出土。阪南市域で最も古いタコツボ。弥生土器と同じつくり方で製作した



マダコツボ　(飛鳥・奈良時代)

貝掛遺跡出土。土師器※の釣鐘型で紐を通す孔がある

マダコツボ　(平安時代)

馬川遺跡出土の土師器。底部は丸く、口縁部下には紐をかけるくびれがある

マダコツボ　(中世)

田山東遺跡出土の土師質土器※。底部がとがり、口縁部下には紐をかけるくびれがある

マダコツボ　(近世)

土師質土器。内型づくり※で、内側に布目がみられる

マダコツボ　(近世)

土師質土器。内型づくりで、内側に布目がみられる。体部に水抜き用の孔がある

マダコツボ　(近代)

土師質土器。ロクロづくりで、現在の兵庫県明石付近でつくられたもの。体部に墨書(判読不明)が見られる

マダコツボ　(近代)

土師質土器で、現在の兵庫県明石付近でつくられたもの。体部に水抜き用の孔がある

マダコツボ　(近代)

土師質土器で、現在の兵庫県明石付近でつくられたもの。体部に墨書「た」が見られる

マダコツボ　(近代)

土師質土器で、体部に墨書(判読不明)が見られる

マダコツボ　(近代)

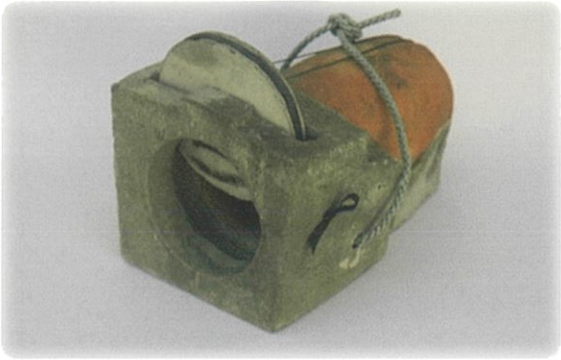
土師質土器で、現在の香川県多度津でつくられたもの。体部に持ち主の墨書「成尾」が見られる

マダコツボ　(現代)

プラスチック製。浮き上がらないように中にコンクリートが入れてある。体部にマジック書「ト七」(屋号)が見られる

マダコツボ　(現代)
プラスチック製。浮き上がらないように中にコンクリートが入れてある。体部に焼印「ト七」(屋号)が見られる

マダコツボ　(現代)
コンクリート製で、漁師の手づくり



マダコツボ　(現代)
土師質土器。コンクリート製の蓋が付けてあり、エサをとると蓋が閉まる

マダコツボ　(現代)
プラスチック製。浮き上がらないように中にコンクリートが入れてある。中のエサをとると蓋が閉まる

イイダコツボ　(古墳時代)
貝掛遺跡から出土。須恵器(すえき※)の釣鐘型(つりがね)

イイダコツボ　(飛鳥・奈良時代)
貝掛遺跡から出土。須恵器の釣鐘型

イイダコツボ　(近代)
土師質土器の釣鐘型

イイダコツボ　(近代)
アカニシガイ製

イイダコツボ　(近代)
サルボウガイ製。二枚貝の間に入るイイダコの習性を利用したもの

イイダコツボ　(現代)
土師質土器の釣鐘型で、コンクリートの重りを付けている

イイダコツボ　(現代)
土師質土器で、テブトと呼ばれる大きなイイダコ用。体部及び底部にペンキ書「ヤ」「ス」「イ」が見られる

イイダコツボ　(現代)
カップ酒のガラス容器を転用※

タコツボ以外の漁具

ウケ　(現代)

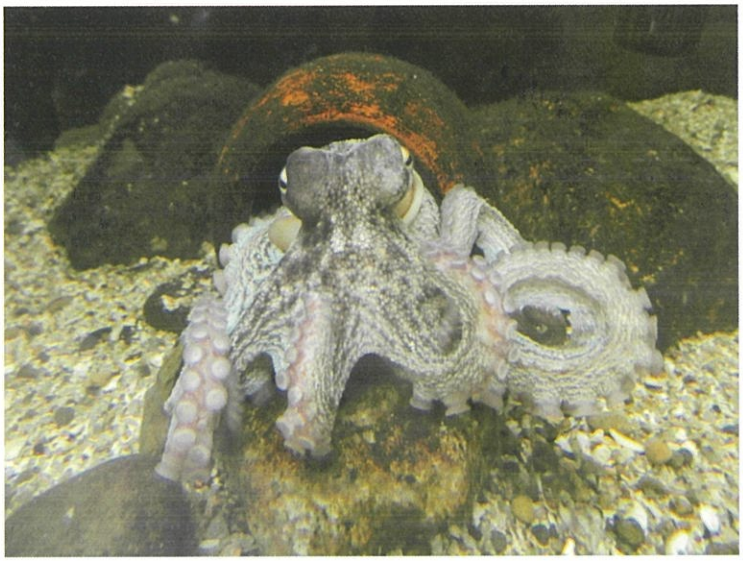
仕掛けの両端に付ける浮き。発砲(はっぽう)スチロール、ビニール、自転車のチューブなどを使って手づくり

オモリ　(現代)

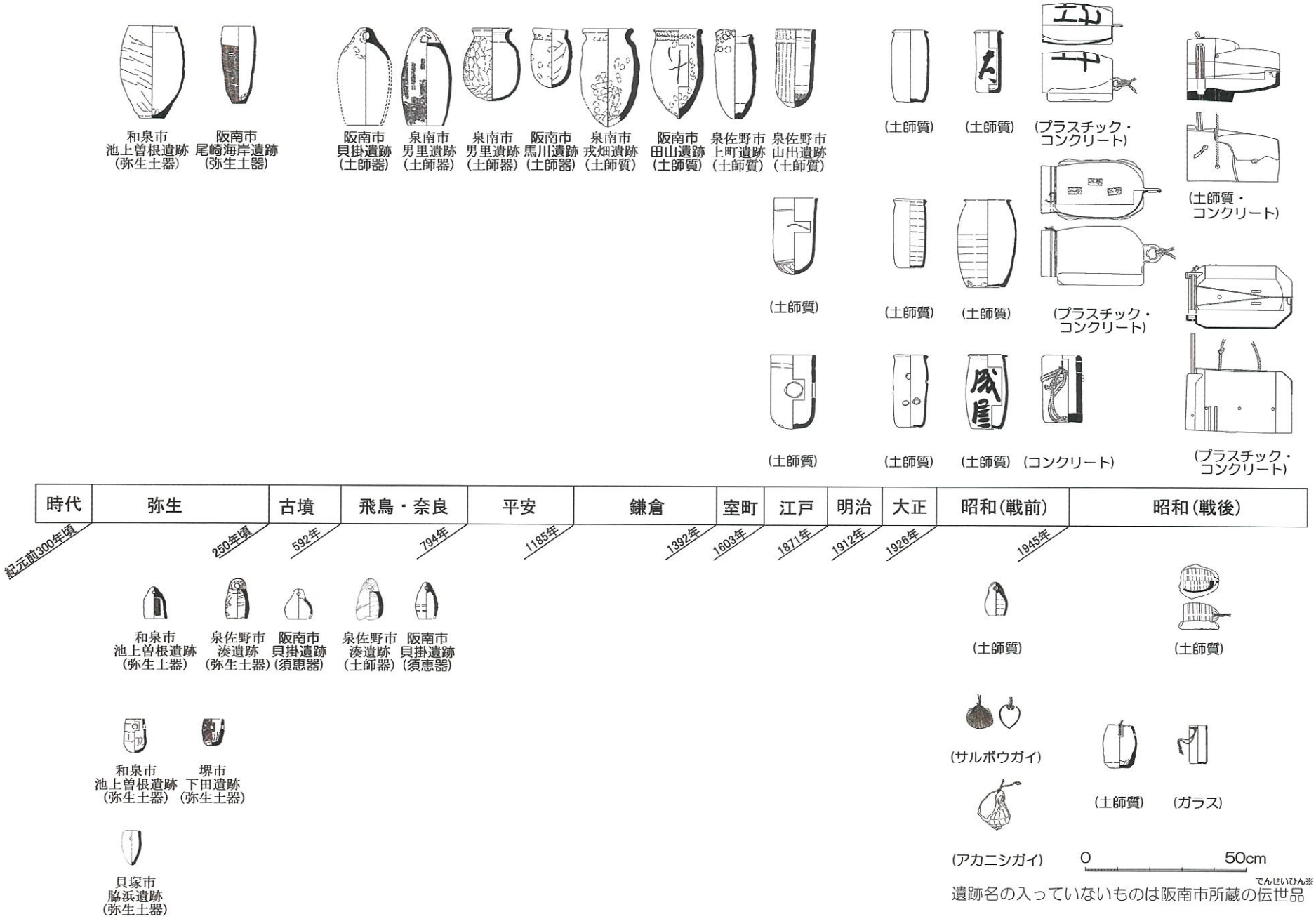
仕掛けを沈めるための重り。コンクリートブロックと自転車のチューブでつくってある

タコカゴ　(現代)

底部にエサを入れるポケットがある



マダコ(きしわだ自然資料館)

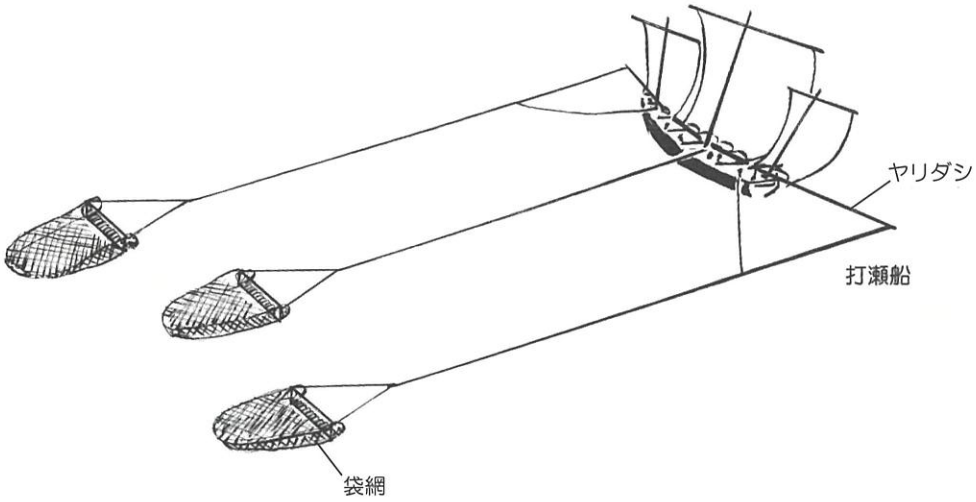


マダコ・イイダコツボ編年表

◆泉州で始まった和泉打瀬◆

江戸時代中期(約320～210年前)に泉州地方で始まったとされる漁法に打瀬網漁があり、「和泉打瀬」と呼ばれました。打瀬船に2～3枚の帆を船体に平行して張り、風の力で船を横に走らせます。船からはヤリダシという棒を出し、「袋網」をロープで何本も取り付け、風の力で水底の網を引きまわし、海底にすむエビ、カニ、カレイ、ヒラメなどを獲る底引き網漁の一種です。

大阪湾の漁村は、古代より奈良・京都・大阪などの大消費地を間近にひかえていたことから、高度な技術が発達したと思われます。



コラム

阪南市域の近世の漁業

阪南市域の近世の漁業について、今のところ詳細は不明ですが、残された史料の中から、いくつか読み取ってみましょう。

宝暦14(1764)年の波有手村(阪南市鳥取)の漁村について書かれた史料(石川家文書)によると、当時、渡海舟(※)が5艘、漁師舟は27艘あり、その内、二人乗りで沖に出て手繰網漁(※)を行う舟が7艘、また、一人乗りで沖に出て蛸引(※)稼ぎを行う舟が20艘あったということです。地引網は大小合わせると6帖(※)あったと書かれています。その内のひとつは、舟2艘を使い、男女共20人ほどずつで引く大きなもので、残りは鰯漁の時だけに使う小さな網だったようです。

また、寛政11(1799)年の尾崎村(阪南市尾崎町)について書かれた史料(松井家文書)を見ると、村には50石(※)～100石積みの物を売買する船が6艘、20石積みの通船(※)が8艘、200石積みの船が1艘、そして漁船は67艘あると書かれています。尾崎村は浜(孝子越)街道に沿って人家や商家が建ち並び、商いの船や連絡船も多かったようですが、やはり漁船の数が飛びぬけているのがわかります。

◆泉州の船「黒舳」◆

船大工については、文化２(1805)年に書かれた「農業之間百姓稼方其外取調書上帳」(南家文書)を見ると、人数まではわかりませんが、尾崎村(阪南市尾崎町)と新村(阪南市鳥取)に船大工がいたようです。ただし、この書上帳には箱作村(阪南市箱作)は含まれていませんが、漁村であった箱作村にもおそらく船大工はいたと思われます。

また、明治４(1871)年に書かれた同じく新村に関する「明細帳」(成子家文書)には、船大工が５人いると書かれています。漁船については、手繰網漁※や蛸引漁を行う船が24艘あったようです。

当時の船は、和船と呼ばれる日本固有の木造船で、中でも泉州の漁船は、舳先(水押し)が黒く塗られていることから「黒舳」と呼ばれました。これは江戸時代中期(約320～210年前)の岸和田城主岡部氏の御座船※を受け継いだものといわれています。

木造船からプラスチック船に変わるのは昭和40年代ですが、泉州では昭和の終わり頃まで、舳先が黒く塗り続けられたということです。現在、阪南市には尾崎港、西鳥取漁港、下荘漁港の三港がありますが、黒舳を目にする機会は、ほとんどありません。

船大工横田氏製造の黒舳　　写真提供：横田一芳氏(阪南市尾崎町)

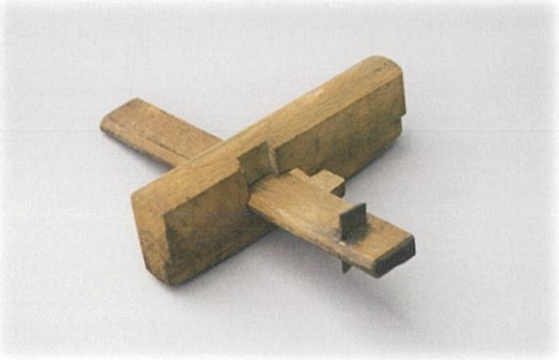
阪南市
指定文化財

◆横田家船大工用具◆

横田氏は新町在住の船大工で、伯父が経営していた阪南市鳥取の造船所で修業した後、昭和25(1950)年に22歳の若さで独立し、昭和60(1985)年まで貝塚市脇浜で造船業を営んでいました。造船技術は、代々船大工の手によって受け継がれてきたといいます。泉州地域の木造船を100艘以上手掛けられ、長年にわたり地域の漁業を支えてこられた横田氏の船大工用具91点は平成25年1月18日に阪南市指定有形民俗文化財に指定されました。

スミツボ
スミを付けた糸を利用し直線を引く

スミサシ
スミをしみ込ませ印を付ける



ケビキ
平らな木材の表面に線を引く

チョンナ
曲面を削る

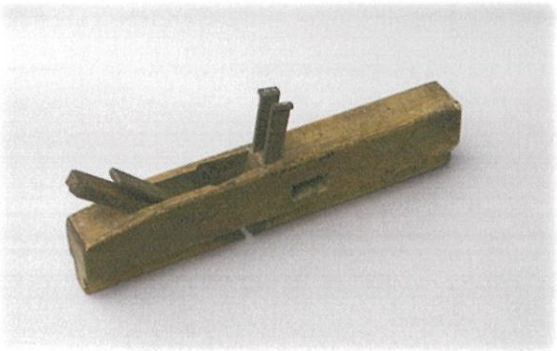
ノコギリ
材を切る

ノミ
材に穴をあけたり溝を掘ったりする

ノミ
材に穴をあけたり溝を掘ったりする

ヒラガンナ
板や角材の表面を平らに削る

シャクリガンナ
溝を削る



モトイチシャクリガンナ
溝を削る。定規で深さを調節できる

キカイシャクリガンナ
細い溝を削る。構造が機械的に見えるためこう呼ばれる

アイシャクリガンナ
角をつくる。定規付き

キワガンナ
材の隅や角の部分を削る

ソリダイガンナ
下側を船底(ふなぞこ)のように反らしたカンナで、表面を凹面にする時に使用する

ヒフクラガンナ
シャクリガンナで削った溝の側面を削る

マルガンナ
曲面を削る

スリノコ
船材の接合面をすり合わせ密着させるのに使うノコギリ

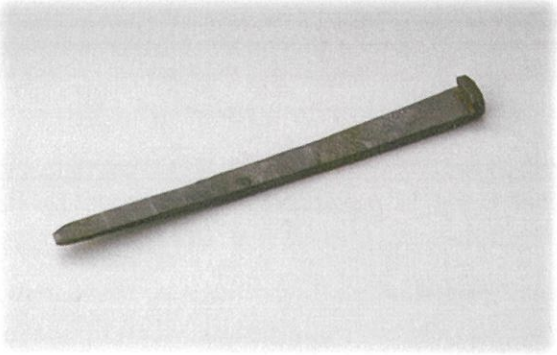
クギサシ
フナクギの通る穴をあける

ブチヌキ
クギサシであけた穴の削りくずを取りのぞく

カタツバノミ
クギサシであけた穴に再度通し穴を確認する

カナヅチ
フナクギを打つ

ボートー
材と材をつぎ合わせる

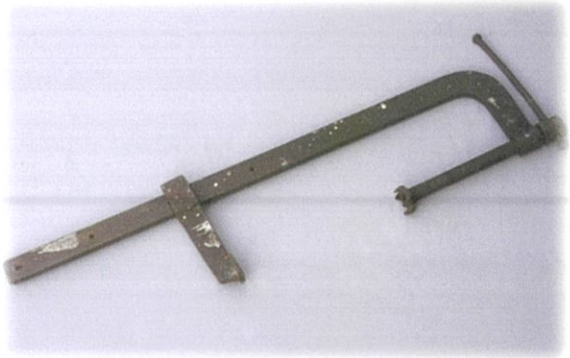


オトシクギ
材と材をつぎ合わせる

ヒラクギ
材と材をつぎ合わせる

クギシメ
オトシクギを中まで押し込む

ノミウチ
マキワタ※を詰める



ハタガネ
板の仮止(かりどめ)に使う

シャコマンリキ
板の仮止に使う

メタテヤスリ
ノコギリの目立(めたて)に使う

トイシ
ノミなどの刃を研ぐ